



英語・小論文

試験科目		ページ	解答用 紙枚数	時 間
英 語	〔英語コミュニケーションⅠ， 英語コミュニケーションⅡ， 英語コミュニケーションⅢ， 論理・表現Ⅰ，論理・表現Ⅱ， 論理・表現Ⅲ〕	から1科目 1～4	2枚	70分
小論文		5～10	1枚	90分

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。
2. この問題冊子は10ページある。印刷不鮮明の箇所などがある場合には監督者に申し出ること。
3. あらかじめ届け出た試験科目(英語，小論文の内の1科目)を解答すること。
4. 解答はすべて別紙の解答用紙に記入すること。
5. 解答用紙の指定欄には必ず受験番号を記入すること。
6. 解答用紙の評点欄には何も記入しないこと。
7. 英語の解答用紙の右下にある破線枠内には何も記入しないこと。
8. 解答用紙は持ち帰らないこと。

英 語

I

次の英文を読み、下の設問(1)～(6)に日本語で答えなさい。

この部分に記載されている文章については、著作権法上の問題から公表することができませんのでご了承ください。

この部分に記載されている文章については、著作権法上の問題から公表することができませんのでご了承願います。

[設問]

- (1) 2人以上で会話をしている際に、相手から目を離すのはどんな時ですか。
- (2) 下線部(a)を日本語にきなさい。
- (3) 顔のあらゆる表情の中で、アイコンタクトが最も重要であることを示す事実は何ですか。
- (4) 子供にとって、アイコンタクトはどのようなものですか。
- (5) お互いに話したくないと思っている二人が近づいてくると、どのような行動が観察されますか。
- (6) アイコンタクトの研究結果によれば、地位が異なる3種類の人間関係によって、アイコンタクトはどのように変化しますか。

Ⅱ 次の(1)～(5)の空所()に最も適当な英語の単語(1語)を入れて、対話の意味が通じるようにしなさい。

(1) A: How was your meeting with the new project leader?

B: It went great! Her strategic skills are superior () anyone we've worked with before.

(2) A: Why don't we ask Tom to persuade Nancy to help finish the project?

B: Sure. He will find () easy to encourage her to do that extra work.

(3) A: At that time, almost nobody believed what Galileo argued.

B: Yeah. But, his theory turned () to be correct after his death.

(4) A: What did you think of the presentation?

B: It was exactly () we needed to move forward with the project.

(5) A: Are you going to the picnic this weekend?

B: Yes, I'll be there () if it rains.

Ⅲ 次の(1)～(5)が正しい英文になるように、それぞれの()の中の語句を並べかえなさい。解答用紙には()内のみ記入すること。

- (1) I would rather let (him, the, know, keep, truth, than) a secret.
- (2) The presentation I am (human, for, focus, preparing, will, on) resource management in Japan.
- (3) Alaska (any, larger, state, is, other, than) in the United States.
- (4) He (carry, kind, not, was, enough, to) my bags for me.
- (5) Surely, (long, be, it, before, will, not) the police arrive here.

Ⅳ 次の2つの英語の質問から1つを選び、解答用紙の()に選択した質問の番号を記入のうえ、100語程度の英語で自分の考えを書きなさい。(How are you? は3語と数えます。)

- (1) Which do you prefer, using real money (paper and coins) or electronic money?
- (2) What is the best way to relax after a long day of study?

小 論 文

以下の資料は、村上靖彦『客観性の落とし穴』(筑摩書房, 2023 年)からの抜粋である。これを読んで、次の設問すべてに答えなさい。なお、出題にあたって、資料の小見出し等を省略し、一部表記を改めた。

問Ⅰ 資料を 600 字以内で要約しなさい。

問Ⅱ 資料を参考に、文化、社会、経済、政治の分野で、客観性を突き詰めることで生じる不都合について、あなたの考えを具体的な事例を示しながら、600 字以内で述べなさい。

解答は、解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答にあたっては解答用紙の 1 マスを 1 字に使い、句読点、引用符、カッコなどはいずれも 1 字として扱う。ただし、算用数字、アルファベットは 1 マス 2 字とする。

＜資 料＞

自然，社会，時間，心というように世界のありとあらゆる事象は 19 世紀から 20 世紀にかけて客観的にとらえられるものとなっていた。そこから客観的な事象こそが真理であるという現代人の多くが共有する発想が生まれる。ところが客観性が支配する世界はたかだか 200 年弱の歴史しか持たない。科学史家のダストンとギャリソンの『客観性』というタイトルの本によると，19 世紀半ばに出版された書物でようやく客観性という言葉が普及しつつあったという。

イギリスの文人トーマス・ド・クインシーは，1856 年の『阿片常用者の告白』の第二版で「客観性」について以下のように書くことができた。「この言葉は，1821 年（初版の出版年）にはほとんど理解できず，あまりに高度にスコラ学的で，その結果，なじみある日常の言葉のなかではあまりに学術的であり（以下略）」

どうも客観性という言葉は 19 世紀はじめには新語であったものの 19 世紀半ばには普及したようなのだ。

「客観的 objective」という言葉は，昔から存在はしたが，17 世紀には「主観的」という意味をあらわしていた。例えば哲学者のデカルト（1596—1650）は，1641 年に出版した主著『省察』のなかで *realitas obiectiva* という概念を用いた。現在の語感ではオブジェクトに関わるのだから「客観的実在」と訳せそうに思えるが，実際には「思い描かれた実在」のことだった。神の観念は他の観念よりも多くの *realitas obiectiva* を含みこむ，というような言い方がされる。*realitas “objectiva”* は私が思惟^{し い}する観念の内容物であり，“主観的な”ものなのだ。

客観的なデータこそが正しいというのは今ではあたりまえの感覚だが，歴史のなかで徐々に生まれた発想だ。当時，科学の研究成果を公共の場で保証する要請ができたときにモデルとなったのが裁判による評決だったという。17 世紀のロンドン王立協会では，実験に，権威のある学者が立ち会い，信憑性^{しんぴようせい}を証言することで真理を判断していた。

〔権威のある〕古典の記述に反する個人の体験は単なる逸脱と捉えられ、「真の経験」とは認められない。実験室における個人的経験を公共的知識へと変換することが、ヨーロッパ各国のアカデミーの共通課題となったのも、そのためである。「裁判の〔証言を模した〕レトリック」は、まさにこの問題に対する解決策だったのである。

近代的な意味での科学的探究が始まった 17 世紀は、時間に余裕がある貴族たちが科学の中心だった。キリスト教会が強かった当時、聖書およびアリストテレスの教えが「古典」として絶対的な権威を持っていた。ところが近代の科学的探究は、(地動説を唱えたコペルニクスやガリレオの例を始めとして)教会が認定する真理とは^{あい い}相容れない結果をもたらすことになる。このとき神の権威とは異なる権威が必要とされるようになる。17 世紀には、まず証言者の権威によって真理が保証された。「人間の証言」を「事物の証拠」よりも優先する」のだ。

しかしながら、次第に権威ある学者による証言に代わって、機器による測定によって真理が決められるようになる。ガリレオ(1564—1642)がピサの斜塔から重さの異なる大小の球体を落下させて同時に着地することを示し、「気体の体積は圧力と反比例する」というボイルの法則で知られるロバート・ボイル(1627—1691)が空気ポンプ実験を行うというように、^{ねつぞう}実験による客観性が生まれた。次第に目撃者の証言からは独立して、「客観的」に真理が成立することになる。

その後、実験室が多くの大学で設置されるようになった 19 世紀にいたる歴史のなかで、測定が重視されるようになる。

客観性の大事な要素であるこの測定についてもう少し歴史を振り返ってみよう。

2014 年に、動物細胞をある種の酸に^つ浸けることによって、あらゆる細胞へと分化しうる万能細胞になるという「発見」がなされた。しかし、それを証明した論文は画像の修整や捏造が明らかになり、論文が撤回された。この STAP 細胞事件は図像が客観性を保証するという社会的な合意を逆手に取るものだったといえるだろう。

科学は図像を多数用いてきた。顕微鏡を用いた細菌学や、fMRI のような大規模な機械によって臓器を撮影する医学や神経科学が顕著な例であろう。つまり現在でも図

像は客観性を保証する手段となっている。同時にこの客観性は、写真を加工することや、都合のよい実験結果だけをデータとして採用することで比較的容易に結果をゆがめることができる。

美しいデッサンを多数残した 18 世紀から 19 世紀前半までの自然科学は、実は目の前にあるサンプルを忠実に模写していたわけではなく、理想形を描いていたという。つまり客観性を求めたのではなく、自然の本性の定着をめざしてきたのだと、先ほど取り上げたダストンとギャリソンは論じている。偶然による誤差や奇形に満ちた具体的自然ではなく、神が創造した自然が表すはずの美しい真実 truth、理念を描くことが求められた。現代ならば「捏造」と言われる理想的な図像こそが、真理を表現するのだ。

スウェーデンの博物学者カール・リンネが作成した植物図鑑も「客観的とはいいいがたい」ものだったという。正確にサンプルを模写するのではなく、特徴を強調して草花の一般的な姿を提示するのだ。「リンネや啓蒙期^{けいもうき}の学者たちが依拠した規範は、客観性ではなく本性〔自然〕への忠誠(truth to nature)だったのである」。科学者とは、神が創造した自然の理念へと直観的に一気に到達する人物のことだった。この直観を 18 世紀の学者は図像化しているのだ。

神の権威が弱くなるなか、18 世紀後半の啓蒙思想やフランス革命以降の西欧社会において、学問の真理は神が保証するものではなく、自然そのものの現れにおいて確かめられる必要が出てきた。自然の理念を描くのではなく、自然そのものを客観的に描こうとするのだ。こうして客観性こそが真理であるという通念が生まれることになる。19 世紀半ばになると、「客観的な」図像をどのように作成するのかが、大きな課題になってくる。

機械による客観的な測定はこの文脈のなかで生まれたものである。社会学者の松村一志は測定をおおむね時代順に並べて六段階に分けて整理している。

- ①感覚の段階……身体感覚によって確認する
- ②視覚化の段階……物質変化を目視する
- ③数量化の段階……物質変化に目盛りを与える

- ④誤差理論の段階……〔複数回測定して〕測定精度を誤差理論によって分析する
- ⑤指示・記録計器の段階……物質変化が目盛り上の指針の動きに変換され、記録される
- ⑥デジタル化の段階……数量をデジタル表示する

①から③は、判定者が重要になるから、証言によって結果を保証する必要がある。しかし④以降は機械が自動的に計測することになり、測定結果は研究者の手を離れて自立していく。つまり「より客観的」になる。

ただし、機械があったから客観性が追求されたわけではなく、むしろ客観性の追求への意志が先にあったようだ。たとえば19世紀に発展しつつあった写真という新技術は、偽造・修復可能だ。写真技術ゆえに客観性が重視されるようになったわけではなく、機械的な客観性を目指す要請のほうが先に立ち、写真はその要請のために重宝されたのだ。

客観性とは、人の目というあいまいなものに「邪魔されずに見る」ことを指すようになる。こうして機械的客観性が成立する。写真という機械を手にしたことによって「人間による判断から解放された表象を手にすることができる」と信じられたのである。自然は神からも人間からも切り離された、それ自体で成り立つリアリティとなる。自然を人間から切り離して正確に認識しようとする意志が、主観性への排除と客観性への執念を生んだのだ。

19世紀末から客観性はさらなる段階へと進む。測定や記録された図像の正確さに依拠した機械的客観性は、法則、記号をもちいた論理構造に主役の座を譲る。

たとえば、ゴットロープ・フレーゲ(1848—1925)に始まる19世紀末からの現代数学の進展も、人間の操作とは無関係に成立している論理的な関係のなかに数学の基礎を求めるようになっていった。あるいは物理学においてはマックスウェル方程式のような構造が科学的な実在とみなされるようになった。測定ではなく方程式や論理式が客観性となる、ということだ。言い換えると、「それは何か？」ではなく「事象と事象がどういう関係でつながっているのか？」に焦点が移るということである。

19世紀末から20世紀初頭に活躍した物理学者のアンリ・ポアンカレ(1854—1912)

は次のように語っている。

「科学の客観的価値とは何か」と問うとき、その意味は「科学はものごとの本当の性質を教えてくれるか」ということではない。「科学はものごとの本当の関連を教えてくれるか」ということを意味する。

個々の対象ではなく対象間の法則こそが客観性だとみなされるようになるのだ。法則性が重視されることで、人間の関与は一層抹消される。さらには法則の方程式にはどんな数値が代入されてもよいわけだから、個別の対象も抹消される。数式と数値だけが残るのだ。

法則性の追求によって、あらゆる学問の成果は研究者の意識を離れて、客観的に保証されるようになる。図像も機械による測定も離れて、論理的な整合性こそが、自然の科学的真理を言い当てると考えられるようになるからだ。

論理的な構造が支配する完全な客観性の世界が自然科学において実現したとき、自然は実はそのままの姿で現れることをやめ、数値と式へと置き換えられてしまう。自然を探究したはずの自然科学は、自然が持つリアルな質感を手放すようになるだろう。雨や風の音や匂い、草木が繁茂していく生命力は消えていく(もちろん事象のリアリティにこだわりつづける生物学者・生態学者もいるだろうが)。客観性の探究において、自然そのものは科学者の手からすり抜け、数学化された自然が科学者の手に残ったのだ。

令和7年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

経済経営学類 一般選抜 前期日程

大学教育をはじめ、高等教育の場であればどこでも、与えられた情報を正確に読み取る読解力、資料を整理し再構築する構成力、そして学んだ知識・経験を踏まえ、形成した自分の主張を自らの言葉で明快かつ簡潔に表現する文章力は、基礎的学力として前提とされる能力の一つである。

本出題は、村上靖彦『客観性の落とし穴』（筑摩書房、2023年）のうち、17頁から27頁を資料として与えたうえで、そこから著者の論点を的確に読み取り、論点を整理・再構築する力を試す目的で出題した。あわせて、この論点に対する自分の意見をまとめ、正確に、かつわかりやすく、表現する能力があるかを判定したいという意図も、出題意図の一つである。